

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、16 ページにわたって印刷してあります。また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**や**・**や**「**や**」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。**
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 話すことで真率な人柄が感じられる。
- (2) 甲高い声が響きわたる。
- (3) 唐の中葉に活躍した詩人。
- (4) 悔しさに地団駄を踏む。
- (5) 謹厳実直な人物だ。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 誤った考えをゲンカに否定する。
- (2) 己のナマビヨウホウを改め、努力を続けていく。
- (3) イサイは後日連絡する。
- (4) 今はカキュウ的速やかに行動するべきだ。
- (5) 原点にカイキして再出発する。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

このまま絵師として進むかに迷いを感じていた青山（「僕」）は、水墨画の師、湖山から古い筆を手渡され、それを携えて湖山の山荘に赴く。そこは、湖山の高弟で天才的な技巧を誇った齊藤湖栖が、絵に行きづまりを感じ、自己の絵を厳しく見つめ直すために身を置いている場だった。齊藤の思いに触れた青山は、山荘前の湖の風景を描き始める。

絵は次の形に移り始めた。そろそろ頃合いだ。僕は薄墨に穂先を浸し、中墨を軽く吸い、濃墨を硯からとった。それらを軽く叩き、筆を整えないうように注意しながら調墨した。

勝負は次の一線で決まる。

浅い息だけが聴こえていた。そのほかの音は、すべて消え去り、世界は画仙紙の中にあるかのように白くなった。

およそこの筆は線を引く道具ではない。四方八方に毛が散らばり、線を引こうとしたとたんに広がりながら、ばらけ始める。細かくも描けない。小さなものも簡単には描けない。

けれども、この世界の大きなもの、雄大な景色を描くなら、むしろこんな大雑把なものがいい。自然はあらゆる細部を、それを動かす大きな力に従って創り上げていく。

混沌を清らかな意思と大きな力で用いるとき、自ずから、線は美を作り上げる。

手はゆっくりと動いた。身体も角度を静かに見定める。

僕は数秒後の未来の自分の動きを予測する。身体の動きを、何度も意識し、線と律動を予知し続ける。呼吸は、その一秒にも満たない未来に向かつて重なっていく。

「描こうなんて思うな。」と、何処かから声が聞こえた。湖山先生の言葉だった。

先生はあのとときそう言った。

描こうなんて思うな。

(1) 筆に言葉が刻まれているかのようだった。いま描こうなどと思っただけいけない。描こうと意識することで、描こうとする意志だけが描かれてしまう。今ならそれが分かる。焦りを以って描けば焦りが、哀しみを以って描けば哀しみが、喜びを以って描けば、喜びが筆致に表れる。欲が出れば、線は死ぬ。

では、心が何も思わなければ、何が描けるのか。

何も思わないとき、何があらわれるのか。

その先に言葉がないことに気づくと、目の前に白い壁が現れた。何も見えない。真っ白な壁だ。音も光も空気も心配もない。

ただの白がそこにあった。それはもしかしたら黒かもしれない。それについて思うことも、もう止めた。

最後に息だけが聴こえた。

身体の重さが床に向かって落下する刹那、手から意識が消えた。

急激に視界が開かれ、身体が一本の線になった。他のものは何も無い。ただ一本の線の印象があった。それが僕になった。手はその閃きと同時に動き、紙面を擦りながら描かれる一筆のきらめきが変わった。

湖面が引かれていく。

画面から、自分の心に向かつて。

自らの内側に向かつて、線は引かれていく。線は僕の内側に向かい、消えていく。

そこに森羅万象がある。

何度も繰り返し、それに触れるために描き続けるのだ。他のあらゆることは、この線に従いながら決められていく。運命とはこの流れのこと

だ。その人が生き、思い、関わっていく命のつらなりのことだ。(2) 僕の中に線があった。僕は線を思い描いた。

僕は出逢ったすべてを引き込むように、その線を引いた。

そして、描き尽くすと、僕の内側にある線は消えた。消えた線は、紙面に描出されていた。

散らばっていく毛先は、画仙紙の上で、墨を吐き出しながら輝いていく。汚されて輝くなんて、どうしようもなく滑稽だとも思った。どこか哀しくて、切ない。それでも生きることが、何かを失いながら輝くことなのだ、線を動かしながら思った。

一筆が終わると、もう一度墨を継ぎ、手前の湖面を描いた。湖面の上さらに湖面が重ねられ、さざ波が映る。風がこちらまで吹いてくる。奥に吹いた風が、こちらに戻ってきたかのようにだった。

僕はそのままばらけた穂先で薄墨だけを含ませて、奥側の木立の上方を、さっと払った。すると、木立の天に山ができあがった。たった数筆で山脈は生まれた。遠景のさらに向こうには、湖畔を見守るように淡い山脈がそびえたっている。こんなに大きなものが、いとも容易い。返す筆で、湖面の中に映り込む山脈を、不均一に描き足し、小さな点を加えて細部を整えた。

また立ち上がり、遠くから絵を眺めた。心の内側に映る景色は、動きを止め始め、絵の景色に被さるうとしている。何もせず、見つめることが今は必要だと思い、手を止めていた。なぜそんなことを思うのかと、考えていると西濱さんの顔を思い出した。

そうか、彼が教えてくれたのだ。僕は微笑んでいた。完成の前、少し手を休める。真の達人の言葉だった。

これが、僕が見ていた景色なのだろうか、と筆を握ったまま、ぼんやりと思っていた。

\* かつて湖山先生が見せてくれた景色に、ようやくたどり着いた。

はじめて描き上げた景色なのに、どこか懐かしい気がするの、これが湖の景色だからだろう。僕が愛し、信じた人たちの心だ。

そして、ここに加わりたいと思っていた場所だった。

(3) 長い長い時間をかけて、やっと彼らを描けたような気がした。「先生……。」と声に出して呟いていた。墨が乾いていく。

僕は穂先に少しだけ濃い墨を付けて、布巾で乾かし、湖面の遠景に小さな舟を描き足した。これは、さ迷い歩いた僕だ。湖山先生の水辺を進んでいた。

そのまま、山の裾に消え去る雁を数羽、描き入れた。人の字を小さく毛先で描くだけだ。これは、僕には届かなかった僕の師たち……。描き込んだ後、離れて眺めると、深い感謝が湧き起こってきた。達成感はなく、それだけだった。

一歩、二歩と離れて、目の中で細かな点が景色の中に吸い込まれていくと、絵はまるで別の顔を見せ始めた。離れる度に絵がまとまり完成していく。筆致は消え、部分が全体に変わり、絵に光が差し込む。退きながら、遠のいているのに、絵の印象は強くなる。最も大きく見えたところで、足が止まった。右手の力が抜けて筆を落としそうになり、慌てて左手で支えた。退くことで見えるものも、あるのかもしれない。

(4) ふいに力が抜けて、僕は目を閉じた。

そこには描いたものと同じ、黒白の景色が広がっていた。色なんて、もう、どうでもよかった。そこには思い描いた光景があった。僕が探せなかった命の広がりがあった。

ありがとう、と誰かや何かに向かって言った。

僕以外のすべてに向かって、言ったのかもしれない。

生きることや、自然と、とてもよく似た何かを、僕は想っていた。

「おい、起きろ。青山君。」

と、僕は頬つべたを叩かれた。聞き慣れた声だった。目を開けると、西濱さんの逆さまの顔があった。

「こんなところで寝ていると、風邪ひくぞ。」

差し出された手を取って起き上がると、湖山先生がこちらに背中を向けて立っているのが見えた。下を向いて、僕が描いたものを眺めている。眠る前よりも室温が下がっていた。暖房を入れているのだからうけれど、部屋が広すぎてうまく機能していない。

「どうしてここに。」と思ったよりもか細い声で、僕は訊ねた。

「君が絵を描き上げたっていう連絡が斉ちゃんから入ってね。それなら、行こうって湖山先生が言い始めたんだ。明日にしませんかって言ったんだけど、絶対来るんだって。」

「それは、お疲れ様です。」と謝るように頭を下げた。

「いや、いいんだよ。実は、俺も来たかったんだ。君がどんな絵を描くのか俺も知りたかった。ところで、斉ちゃんはどこ？」

「たぶん外にいるんだと思います。普段もあまり家の中にいないみたいです。独りで生活しているので山仕事とか、近所の人の手伝いとか忙しみたいです。」

「ああ、なるほどね。こんなところにいると、そうだろうね。ちょっと探してみようかな。」

「ああそれなら……。」と話そうとすると、「青山君！」と声が聞こえた。

僕は背筋を伸ばし、先生に駆け寄った。板の上の足の裏が冷たい。先生は、絵から視線が外れない。何か不味いことをしてしまっただろうかと数歩の間に考えた。視線の脇に転がった黒い筆がある。気を失ったので、転がっていったのだ。これは不味いかも思えない、と思った。恐る恐る先生の顔を覗くと、やはり絵を見ている。眉間に皺が寄っていた。

「どうやって謝ろうかと、曖昧な言葉を呟いたとき、

「見事だ。」

と、聞こえた。僕は意味が分からず、「すみませんでした。」と謝った。さらに、眉間に皺が寄った。僕はすぐに「なんでもありません。」と繕った。

「いい絵だよ。これは、いい絵だ。何も言うことがない。」

「<sup>(5)</sup>白が生きている。描くことが描かないことを邪魔していない。言葉もない。」

顎鬚を撫でる先生は、初めて会ったときのようにただのお爺さんに見えた。いまさら先生が他人のように見えるなんて、不思議な気がしていた。なぜだろうと思っていると、先生に褒められるという異質な状態に自分が慣れていないからだ気づいた。そしてあのときも、こんなふうになり、目がいいと褒められていたからだ。僕のがんが、過去を覚えていた。「先生、描いていて、線が消えました。そして、線が消えて、それでもいいと思っていたら、風景が出てきました。それを筆が教えてくれました。描こうとしなくなったら、描けました。」

それを聞くと、先生は破顔した。

「そうか。よかった。」と言った。それから少し寂しそうに、「ありがとう。」

と言った。僕は意味を掴めなかった。

戸惑っていると、

「あれも、君が？」

と先生が風景の脇に置いてあったカラスの絵を指差した。左手で描いた下手だが美しいカラスの絵だった。「あれは、斉藤さんが……。」と説明しようとする、スタスタと近づいて絵を持ち上げた。先生の表情が強張り、さっきまで浮かべていた笑顔が消えた。

そのとき足音が聞こえた。そこには斉藤さんが立っていた。

「湖山先生……。」呟きながら、彼は立ちつくしている。西濱さんの目が驚きで、見開かれた。僕と同じ反応だ。にわかには彼だと信じられな

いのも無理はない。汚れた手や焼けた顔、汚れきった服や野人のような髪は、かつての彼とは結びつかない。

先生はまだ絵を見ていた。目は真剣なままだ。斉藤さんもそれ以上は、近づけない。

「斉藤君。」と先生は絵を見たまま言った。今度は、彼の背筋が伸びた。そのままひれ伏してしまいそうなほど、緊張している。

<sup>(6)</sup>「この絵を、譲ってくれないか。」

と、真面目な顔で湖山先生は言った。斉藤さんは、その場に棒立ちになっっている。何を言われたのか分からないのだ。戸惑いと恐れが目に浮かんでいた。口が半開きになっている。

それでも、彼は一步、また一步と先生に近づいた。先生は絵を下ろした。

近づいた彼の肩に、先生は手を当てた。そして、「斉藤君、画技を極めたな。」

と言った。すると、彼の目から涙があふれた。

(砥上裕将「一線の湖」による)

〔注〕画仙紙——書画用の紙。

この筆——湖山から手渡された古い筆。

西濱さん——青山の兄弟子。

かつて湖山先生が見せてくれた景色——

はじめて湖山に水墨画を習ったとき、湖山が描いた湖と山の絵。

斉ちゃん——斉藤湖栖。

左手で描いた——斉藤はあえて利き手ではない左手で描くことを試みている。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 筆に言葉が刻まれているかのようだった。とあるが、「僕」が感じ取ったことを説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 使い込まれた古い筆は、すぐに描こうとせずに技術を習得する努力を重ねることが大切だという先生の教えを伝えるものということ。

イ 細部を描くことが困難な筆には、あえて苦勞を味わわせることで技巧を極めさせようとする先生の願いが込められているということ。

ウ ぼろぼろの古びた筆には、この筆を通して水墨画の真髓を伝えようとする先生の深い思いが込められているということ。

エ 穂先が割れた筆は、描く前に心を澄まして対象を正確に把握することが大切だという先生の思想を伝えるものということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 僕の中に線があった。とあるが、この時の「僕」の気持ちを説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 風景を描こうとする意欲が失われるとともに、自身の心の中に現実とは無縁の心象的な風景が立ち現れてくるように感じる気持ち。

イ 表現意識が薄れるとともに感覚が研ぎ澄まされ、森羅万象の姿が客観的に表現すべき対象として心の中に現れてくるように感じる気持ち。

ウ 現実の風景と向き合っているのに現実感が薄れ、心の中に過去の体験に基づく理想的な美の世界が現れてくるように感じる気持ち。

エ 風景を巧みに描き尽くそうとする意識が消えるとともに、自身の心の中に描くべき世界が立ち現れてくるように感じる気持ち。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 長い長い時間をかけて、やっと彼らを描けたような気がした。とあるが、この時の「僕」の気持ちを説明したものと最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 自分の師たちが愛し水墨画家の号にもしてきた湖の景観を実際に目にするのは、これまで以上に深く師たちの心を理解することにつながるものだったと感じる気持ち。

イ 長い努力の末に師の絵に匹敵する絵を描くことができたことを確信し、苦労をいとわず自分をあたたかく導いてくれた師たちに対する深い感謝が湧き起こってくる気持ち。

ウ 師たちの教えに導かれて自分なりに納得できる絵を描くことができたが、これは長い道のりの末にやっと目標としてきた師たちの絵の世界に近づくことができたということでもあると感じる気持ち。

エ 目の前の風景をこれまでに実現することができなかったほどの完成度で描くことができたことは、師たちの教えと自身の修練の積み重ねの結果だと感じ願いがかなった満足感に浸る気持ち。

〔問4〕<sup>(4)</sup> ふいに力が抜けて、僕は目を閉じた。とあるが、ここでの「僕」の様子を説明したものと最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 自分が描いた絵が、これまで描こうとして描けなかった自然や生命の本質に通じるものを表現し、これまでに気付いた様子。

イ 描いた絵が物理的な限界を超えて目の前の現実の風景そのものだと感じさせることに気付き、水墨画の奥深さを感じている様子。

ウ 遠くから見ると絵が存在感を増し、逆に現実の風景を自分の描いた黒白の世界のように見せてしまうことに驚いている様子。

エ 実際の風景を描いたのに紙に描かれたものは自分が表現しなかったものとは異なるものだったことに気付き、ぼうぜん 呆然としている様子。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 白が生きている。とあるが、この表現についての説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 計算され効果的に配置された余白が、描かれなかったものへの想像をかき立てる魅力をもち得ることを、比喩的な表現によって暗に示そうとしている。

イ あえて筆を入れなかった部分が、意味のない無駄な空白ではなく全体を生かす意味ある余白となり得ているということを、簡潔な表現によって表そうとしている。

ウ 描き尽くすことをせず適切に余白を残すことが、描くことでは表現できないものを表現し絵に深みを与えるということを、強く断定的な表現によって教え諭そうとしている。

エ すべてのを描き尽くそうとはしない表現者の控えめな奥ゆかしさが、むしろ風景に複雑な彩りいろどを加えることを、遠回しな表現によって伝えようとしている。

〔問6〕<sup>(6)</sup> 「この絵を、譲ってくれないか。」と、真面目な顔で湖山先生は言った。とあるが、湖山先生はなぜこのように言ったのか。八十字以内で書け。

## 4

次は「個人」の誕生について書かれた文章である。これを読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

文化をダイナミズムの過程として見るということは、言葉をかえていえば、<sup>(1)</sup>ひとつの文化社会そのものも、またその構成原理をも、これまでより動的なものとして見るといふことにほかならない。すなわち、われわれは社会を一定の構成要素の集合と見るのではなく、あたかも光の粒子説にたいする波動説のように、個別化と統一という、ふたつの運動の均衡状態として見ることになる。

常識では思い浮かべにくいことだが、われわれは、まず硬い個人や組織が単位としてあって、それが運動して社会を作るのではなく、最初に社会の運動そのものがあって、それがそのときどきに仮の主体として個人や集団を作るのだ、と考える。もちろん、最初に社会の運動があるというのも便宜的な表現にすぎず、厳密に言えば、最初には個別化と種属維持という原理の葛藤だけがあって、それが生む運動の仮の主体として社会が作られる、といふべきであろう。ついでながら、便宜的な表現としてなら、われわれも当然、個人を行動の主語として語ることは許される。しかし、その場合も、われわれは、あらかじめ実在する個人が社会的行動を起すのではなく、最初に一定の行動の種類とそのため姿勢があって、それが逆に個人という主体のかたちを作り出すのだ、と考えるのである。

いったい、この社会は個人が集まって作ったものか、それとも、まず先に社会が実体としてあって、個人はその構成要素として頭で考えられるだけのものか、というのは社会学の古い難問であった。われわれは、この二項対立そのもの乗り越え、両者に先立って眼に見えない原理と運動があって、それが社会と個人の両方を生んだと見るのである。

一見、奇妙な考え方のようだが、これがじつは現実に即していることは、

<sup>(2)</sup> 社会や個人という概念がいかにあいまいであるかを思い出ししてみれば、明らかだろう。

常識によれば、社会とは自立性を持った個体の集まりのことであって、アミーバの集合体のように、個性の不明確な集団は社会ではないと理解されている。現に、動植物の細胞は単独でもたしかに生きているが、それらが集まって作るのは動植物の「個体」であって、細胞の「社会」ではない。蟻や猿のような動物については、社会という言葉が比喩的に使われており、動物社会学という学問もあるようだが、なぜか植物の群落について社会という表現は使われない。考えてみれば、細胞の塊からアミーバの集合体を経て、植物の群落から動物の集団にいたるまで、その間には個別性の程度の違いがあるだけであるのに、ある単位は個体と呼ばれ、ある単位は社会と呼ばれたりするのが、これまでの実情であった。

両者の区別はじつにあいまいであるが、そのことがまさに、社会や個体が実体ではなくて、ひとつの流動的な状態の名前であることを物語っている。ここで、すべてに先立ってあるのは種属生命とその個別化の相剋であり、それが何段階かの均衡状態を作るなかで、そのひとつとして生みだしたものが社会であり、個体にすぎないと見ることができるのである。

また、人間の単位としての個人にしても、それをたんなる生物的な個体、あるいは物理的な個物から区別して考えようとすると、とたんに、その単位としての自立性は明確ではなくなる。常識的に言えば、個人とは、一定の欲望や意志や趣味を持って自発的に行動し、記憶や反省によってその同一性を保っている存在であろうが、現実にはそういう個人は実体としては存在しない。欲望や趣味は集団の影響を受けやすいものだから、純粹に自発的に行動する人間はありえないし、また、完全な内面の同一性を心理的な次元で保っている人間は、どこにもいない。

どんなに熱烈に世界平和を願う人間でも、心理的な次元ではそれを忘れる瞬間があるし、ほかの問題に迫られて別の願望に心を燃やす瞬間も多い。

彼が個人として平和主義者であるのは、彼が常任坐臥、平和を願っているからではなく、じつは世界観上のひとつの立場を持つているからであり、必要があれば心理状態と関係なく、いつでもその立場に帰れるからである。だが、立場とは文字通りひとつの場所のことであって、場所である以上、理論上は誰もが彼とともにそこに座を占めることができなければならない。というより、ひとつの立場が立場として強いのは、そこに誰もがいっしょに立てる広がりがあるときであり、有形無形の集団によってわけもたれているときだといえる。

そうすると、まことに皮肉なことだが、個人が自己の同一性をもっとも強く保てるのは、彼が強力な同志の集団に属しているときであり、その連帯にもっとも忠実に没入しているときだ、ということになる。このことは、私たちはやや違うが、欲望や意志や趣味についてもあてはまるから、<sup>(3)</sup>一般に個人の個性とはその集団性のことだ、という逆説がなりたつのである。

個人は存在するのではなくて、自己を主張し、表現することによって個人になるのであるが、そういう主張や表現を触発し、それを支える無形の力は個人に先立って存在する。それは、さしあたり眼に見えるかたちでは、さまざまなかあひの主張や表現として現れ、人びとにたいしてそれらの立場に参加するように誘いかける。伝統的な価値観、時代の精神、政治的なイデオロギー、さまざまな宗教や俗信の規範、日常の市民道徳や趣味の流行などがそれであって、これらは個人の誕生に先立って、社会の自己統一の原理、あるいは社会的な種属維持の原理として働いている。人びとはそのまえに立たされ、それを進んで選びとって自分自身の立場とするか、そうでなければ、それを拒否して別の立場を作るように迫られるのであるが、いずれにしても、この選択の姿勢が初めて個人を生むのだといえる。

前者の場合、個人が集団への帰属を通じて誕生しているのは明白だが、後者の場合も、新しい立場が普遍的に有効に作られているかぎり、<sup>(4)</sup>それを作った個人は新しい無形の集団に属している、といわなければならない。

彼はこのとき、たしかに何かを創造したのであるが、この創造は、帽子から鳩を取り出すような、いわば無から有を産む魔術ではない。彼は、眼に見える既成の世界観や価値体系に触発され、それに反発するかたちで新しい立場を作ったのであり、その瞬間、彼は、そうした古い既成の立場を含み、それよりも大きな、まだ眼に見えない時代の気分を言葉にしたのだ、と見ることができるといえる。

こうした選択を行なうまえは、人間はまだ半ば無意識の生物的な個体であって、時代の気分が漠然と帰属して押し流されている。この段階では、個体化と種属維持の原理は低いレベルで均衡しあっており、個体の個性もあいまいだが、同時に、集団化の力もまだ激しい一定の方向をとってはいない。だが、やがて種属維持の原理は、それ自体の要求にしたがって集団化の力を強め、そのために、集団の各部分を一定の方向に動員しようと試みる。集団化を強めるには、集団に明確な輪郭をあたえ、それを中心に向かつて引き緊める必要があるからだが、しかしこれは、種属生命の全体から見れば皮肉な結果を招くことになる。こうした集団の求心力は、当然、集団の規模を一定程度に限定した方が強まるわけであるが、このことはただちに、種属生命の分割と多元化を意味するからである。

さらに、この求心力は、集団の部分がそれぞれに力を持って、その力で積極的に中心をめざすときにより強まるはずであるが、各部分が力を持つとは、とりもなおさず、集団内部の個別化への動きを意味している。具体的にいえば、人間の社会は奴隷の集団であるよりも、主体的な意志の結集による方が統一力を強めるのであるが、それは同時に、自由な個人の集団からの自立にもつながっているのである。

こうして、種属維持の原理は自己を強めるために自己を否定し、まさに逆説的に個別化の原理を求めするのであって、<sup>(5)</sup>この両者がひとつの特定の段階の均衡に達したときに、人類独特の「個人」が誕生したといえる。

(山崎正和「柔らかな個人主義の誕生」による)

〔注〕ダイナミズムの過程——変化し続ける動的な過程。

常住坐臥じょうじゅうざが——一日中。

とりもなおさず——すなわち。

〔問1〕<sup>(1)</sup> ひとつの文化社会そのものも、またその構成原理をも、これまで

より動的なものとして見るといふことにほかならない。とあるが、この考えを説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 社会的な存在として形成された個人だけが確かな存在であり、社会や集団は、個別化の原理と統一化の原理の葛藤によって作り出されたかきそのものに過ぎないとする考え。

イ 個人や社会はあらかじめ存在する堅固な実体ではなく、個人や社会に先立って種属維持の原理と葛藤しながら存在する個別化の原理があり、個人も社会もその原理が動的に生み出すものだとする考え。

ウ 個人は社会を前提としてその構成要素として存在するものであり、社会に深く生を規定され、社会の変化とともにそれに合わせて変容することを余儀なくされた流動的ではかない存在だとする考え。

エ 先に社会が実体として存在すると見るか先に個人が実体として存在して社会を構成すると見るかは古くからの難問だが、二つの見方は同じ事柄の表裏をなすものであり、どちらも正しいとする考え。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 社会や個人という概念がいかにあいまいであるかを思い出してみれば、明らかだろう。とあるが、どのような点が「あいまい」なのか。

これを説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 自然界における生命の個体としてのあり方は多様で流動的なものである上に、人間についても社会からの自立の程度にはそれぞれ違いがあり、すべての人を自立した個人と認めることは難しい点。

イ 同じ生物でも植物と動物ではどこまでを個体と見なすのかの基準が異なる上に、個人より集団が価値をもつ人間の社会においては、個人としての自主性や主体性以上に他者との関係性が尊重される点。

ウ 人間を除く生物では社会や個体に先立って種属生命と個別化の相剋が存在するので、社会と個体の区別は意味をもたない上に、人間においても個人と集団は密接に関わり切り離して考えることができない点。

エ 自然界には個体と見なすか社会と見なすかはつきりしないものも存在する上に、人間の単位である個人にしても、内面の同一性と他からの自立性が完全に保たれた存在とは言いがたい点。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 一般に個人の個性とはその集団性のことだ、という逆説がなりた

つのである。とあるが、どのような点が「逆説」といえるのか。

これを説明したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 個人が内面の同一性を保つためには、志を同じくする者たちの集団に属することが有効な方法となるが、そのことは逆に、他から自立した存在としての個人の意味と価値を希薄にしまう点。

イ 個人の独自性は集団から自立することで形成されると考えられているが、逆に、均質性の高い集団に属し、他者と協調的な関係を築くことが、円満な個性を養うためには欠かせない点。

ウ 他者との差異を保つことが個性の条件だと考えられがちだが、逆に、立場や趣味などを同じくする集団に属することで、個人は個性と自己同一性を強く保持することが可能となる点。

エ 個性を形成するためには集団において自己を主張することが重要だが、そのことは逆に、集団に属する一人ひとりの自立性を高めることにつながり、集団としての結束を損なうことに帰結してしまう点。

〔問4〕<sup>(4)</sup> それを作った個人は新しい無形の集団に属している、といわな

ければならない。とあるが、「新しい無形の集団に属している」とい

えるのはなぜか。これを説明したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 既存の立場に対抗して新しい考えを提唱するためには、既存の立場についての理解を深めるとともに、同じ考えをもつ同志の集団を現実的に組織し自分たちの考えを社会に向けて発信することが不可欠だから。

イ 既存の価値観や世界観を拒否することは、既存の立場を前提としつつそれとは異なる新しい立場を作ることの意味するが、それは他者との共有化の可能性に開かれたものだから。

ウ 自立した個人であるためには同じ考えをもつ同志の集団に属せざるを得ず、一つの価値観を拒否するならば、それとは違う価値観をもつ既存の集団を探し求めてその集団に帰属する必要があるから。

エ 既存の立場を拒否したとしても、拒否すること自体が既存の価値観や思想の存在を前提しているのであり、新しいように見える考えも既存の考えの焼き直しに過ぎないから。

〔問5〕<sup>(5)</sup> この両者がひとつの特定の段階の均衡に達したときに、人類独特の「個人」が誕生したといえる。とあるが、この考えを説明したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 種属生命は自身を強めるため集団の求心力を高めようとするが、それは結果として集団の多元化とともに集団からの個人の自立を促し、そこから主体的な存在としての「個人」は生み出されたという考え。

イ 集団化と個別化は相容れないものだが、集団の力を高めるためには個別化の力を欠くことができず、二つの力の葛藤から、集団への強い帰属心を第一の特徴とする「個人」は生み出されたという考え。

ウ 個別化の進展こそが人類が人類である証であり、個別化の原理は集団を細分化するだけでなく集団の解体を進め、ついに自立した主体としての「個人」が生み出されたとする考え。

エ 近代に向かう時間の流れの中で個別化の原理が種属維持の原理を越えた価値をもつようになり、集団へ属することを拒否し、他と異なる個性と自己同一性を保持する「個人」が生み出されたという考え。

〔問6〕 本文の後で筆者は「個人はまさに」「公共への参加を含んでこそ個人になる」と述べている。自分の立場や考えを築くことと、集団や社会との関わりについて、次の〔条件〕に従ってあなたの考えを二百五十文字以内で書け。

〔条件〕

- 1、や。や「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えること。
- 2 二段落構成にして、第一段落の終わりで改行すること。
- 3 第一段落では、具体的なことからを挙げること。
- 4 第二段落では、3で挙げた具体的なことからについて、あなたが考えたことを記述すること。
- 5 二つの段落が論理的につながり、全体が一つの文章として完結するように書くこと。

次の文章は、歌人である西行<sup>さいぎょう</sup>について述べられた文章である。文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、「」内は現代語訳である。

( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。 )

私が桜の季節に東北を訪れたのには理由があった。それは西行が東稲<sup>とういね</sup>山の桜を詠<sup>よ</sup>んでいるからで、一度登ってみたいと思っていたのである。

陸奥<sup>むつ</sup>の国に平泉<sup>ひらいづみ</sup>にむかひて、東稲と申す山の侍<sup>はべ</sup>るに、

異木<sup>ことぎ</sup>は少<sup>すくな</sup>きやうに、桜のかぎりみえて、花のさきたり

けるを見てよめる

〔陸奥の国の平泉に向かつて行くと、東稲と申す山がありましたところ、他の木は少ないようで、桜の花が見渡す限り見えて、花が咲いていたのを見て詠んだ歌。〕

A ききもせずたばしね山のさくら花

\* よしのほかにかかるべしとは

〔今まで聞いたこともなかったよ。東稲山の桜の花よ。〕

吉野山<sup>よしのやま</sup>のほかに、このように素晴らしいところがあるうとは。〕

今までこの歌は、西行が二度目に奥州<sup>おうしゅう</sup>へ行った時の作とされて来たが、窪田<sup>くぼた</sup>章一郎<sup>しょういちろう</sup>氏は、「はじめて東稲山の桜を見た第一印象の驚異感を、素樸<sup>そぼく</sup>に歌ったもの」とし、初度の旅の歌と断定された。私もそう思う。「ききもせず」と初句切れでうたい出し、「よしののほかにかかるべしとは」と、感歎<sup>かんだん</sup>符<sup>ふ</sup>で止めたところに、西行の驚きと悦び<sup>よろこび</sup>が感じられ、詠む人を花見に誘わずにはおかぬリズム感にあふれている。

東稲山は平泉の東に横たわる神山で、——私があえて神山と呼ぶのは、眼下に流れる北上川<sup>きたがみ</sup>をへだてて、<sup>\*</sup>藤原三代の館を見守るが如く<sup>ごと</sup>そびえて

いるからだ。一名駒形嶺<sup>こまがたね</sup>とも称するのは、尾根のたわみが馬の背に似ているため、たばしねの名も、そのくぼみに、稲を束ねた形を聯想<sup>れんそう</sup>させるからだという。駒も、稲も、農耕の信仰と関係があり、古代にはこの地方の聖なる山と仰がれていたのであろう。

私は歩くつもりで行ったのだが、現在は山をめぐってドライヴウェイが通じており、楽をすることができたかわり、待望の桜には一本も出会えなかった。いつの頃かここで山火事<sup>さんかじ</sup>があつて、桜を全部焼きつくし、今はつじの名所<sup>なしょ</sup>になっていると聞いた。が、頂上の眺めはすばらしく、北から南へ悠々と流れる北上川にそって、平泉の町や中尊寺<sup>ちゆうそんじ</sup>の森が見渡される風景は、藤原清衡<sup>ふじわらのきよひら</sup>がこの肥沃<sup>ひよわ</sup>な地に本拠を構えたわけがよく解るのであつた。

奥州の藤原氏と西行は同族で、秀衡<sup>ひでひら</sup>とはほぼ同年輩であつたから、平泉ではいろいろ便宜を計ってくれたに相違ない。だが、それについてはひと言も触れず、ただ中尊寺で奈良の僧たちと会い、哀れに感じたことを記しているにすぎない。

奈良の僧、とがの事によりて、あまた陸奥国へつかは

されたりしに、中尊と申所にまかりあひて、都の物語

すれば、涙流す、いとあはれなり、かかることは有が

たき事なり、いのちあらば物がたりにもせんと申て、

遠国述懐と申事をよみ侍しに

〔奈良の僧たちが、過ちを犯してしまったことよって、大勢が陸奥の国へと流罪<sup>りゅうざい</sup>に処されていた頃に、中尊寺と申す所に偶然参上することになって、都の話などをすると、涙を流したことは、たいそうしみじみと心を動かされることだ。このようなことはめつたにないことだ。命がもしもあるならば都に戻つて物語にでもしよう、と申し上げて、遠国述懐と申すことを詠みました歌の中に、〕

B なみだをば衣河にぞながしける

ふるき都をおもひいでつつ

〔涙を衣河に流してしまったことだ。古い都のことを思い出しながら。〕

僧の衣に「衣河」をかけて詠んでいるが、ここでも西行は、彼らの身になつて涙を流しているのである。「数奇」と「あはれ」は表裏一体をなすもので、名だたる中尊寺で、金色堂や一字金輪には目もくれず、しがない罪人の僧侶たちと語り合っているのは興味深い。西行の初度みちのく行については、古来さまざまの説があるが、数奇以外にこれという目的はなかったと思う。そのことを誰よりもよく知っていたのは、五百年後に生れた松尾芭蕉で、「そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取もの手につかず〔旅の誘惑をする神に取りつかれて心が落ち着かず、道祖神に招かれているようで何事も手につかなくなり〕』という「奥の細道」の序文は、西行の心境を語ってあますところがない。「五月雨のふり残してや光堂〔五月雨も、ここには降り注がなかつたのだらうか。金色に輝く光堂よ。〕」の句の背後に、西行の涙を想うのは深読みにすぎるであらうか。

衣川を詠んだ歌がもう一つある。

十月十二日、平泉に罷着きたりけるに、雪降り、嵐激しく、殊の外に荒れたりけり。いつしか衣河見まほしくて罷りむかひて見けり。河の岸に着きて、衣河の城しまはしたる事柄、様変りて物を見る心地しけり。  
汀凍りて取り分き互えければ

〔十月十二日のこと、平泉に到着しましたところ、雪が降り、嵐も激しく、ことのほかに荒れていた。はやく衣河が見たくて、急ぎ向かつて眺めた。河岸に着いて、衣河の館は城壁を巡らしており、様子がすっかり変わってまったく別の物を見るような気持ちになった。川の波打ち際が凍り、すっかり冷え込んでいたので、〕

C とりわきて心も凍みて互えぞ渡る

衣河見に来たる今日しも

〔とりわけ心にしみるほどあたりは冷え冷えとしている。衣河を見に来た今日にかぎって。〕

西行の歌の中でも、五指の中に入る絶唱と私は思っているが、多くの学者の研究によつて、はじめて衣川を見た時の歌、というのが定説になっている。一連の初度みちのく行の中に入っているだけでなく、「いつしか衣河見まほしくて」、「様変りて物を見る心地しけり」などの詞が、はじめて見る人の興味と驚きを表しているというのだが、それに間違いあるまい。と思うかたわら、この作品の心の底まで沁み渡るような、叩けば音の出るような実在感、見るべきものを見つくれた人が、最後に到達した冷えさびた境地ではなかつたであらうか。

山家集は、一応西行が選んだにしても、多くの人々の手が加わっているに違いない。何かのはずみで、初度の旅の連作に、この歌がまぎれこんだか、もしくは実方の墓の歌とさし替えられたとしても不思議ではない。私が、ちょっとひつかかるものがある、といったのはそういうわけで、証拠になるものは一つもなく、この歌をどのような思いで味わうか、見る人の心次第にかかっている。詞書の「いつしか云々」は、吹雪の烈しい日に、ふと衣川が見たくなって、わざわざ対岸のよく見える所へ行ってみた。そこには要害堅固な衣川の館が、立派な城壁をめぐらしているのを眺めて、

実に珍しく、「物を見る心地」がしたというのである。

中尊寺も、毛越寺も、横目で通りすぎた西行は、藤原三代の栄華にもさしたる興味は覚えなかつたであろう。が、二度目に来た時は、東大寺再建のための勧進<sup>\*</sup>という重大な役目を帯びていたから、藤原氏の勢力を、しかと見定める必要があつた。そこで、平泉に着く早々、嵐をおかして衣川を見に行き、過ぎ越しかたのさまざまの思いが去来したに違いない。初句の「取り分きて」には、若い頃漠然と見ていた衣川が、今日ほとりわけ肝に銘じた、別のものに映つた、そういう意味に受けとれなくもない。そんなことはいくらいつてもきりがなから止めておくが、歌というものは暗誦<sup>しょう</sup>して、何十べん何百べんとくり返す間に、<sup>(4)</sup>その歌の姿がおのずから見えて来るものだ。単なる主観といつてしまえばそれまでだが、単なる主観に生きた西行を知るには、そういう方法で近づくしかないように思われる。

衣川は、中尊寺の北の岡からも、義経<sup>よしのつね</sup>がかくれていた高館<sup>たかだて</sup>からも望むことができる。ことに雪の夕暮に、かすかに遠望される川の流れば、西行の昔に還る心地<sup>かえ</sup>がして、<sup>(5)</sup>名状<sup>なじょう</sup>しがたい寂しさにおそわれるのであつた。その時、私は衣川を渡つてみたが、そばによるとがっちりした護岸工事がほどこされていて、いたく失望したので、去年の春、東稲山の帰りに、はるか上流<sup>さかのぼ</sup>まで溯つてみた。上流の方を「衣川村」といい、衣川はそこで分れて、北股川<sup>きたまたがわ</sup>と南股川になるが、さすがにこの辺まで来ると、昔のままの景色が残つており、船着場<sup>ふなつきば</sup>の名残りや、古い館跡<sup>みやだ</sup>などが見出される。藤原三代以前の、安倍貞任<sup>あべのさだとう</sup>・宗任<sup>むねとう</sup>が活躍した衣川は、このあたりではなかつたであろうか。衣川を見に行った西行の、冴え切つた心の鏡には、前九年の役の戦鬪<sup>いくさ</sup>も、義家<sup>よしいえ</sup>と貞任との間に交された、「衣のたてはほころびにけり〔衣の縦糸がほころびるように、館も減んでしまったなあ〕」、「年を経し糸の乱れの苦しさに〔長く着た衣の糸が乱れるように、戦を長年にわたつて続けてきた苦しさのために〕」というあの悲愴<sup>ひそつ</sup>な歌のやりとりも、あ

りありと映つていたことだろう。すぐれた歌というものは、いろいろのことを想わせるものだ。

(白洲正子「西行」(一部改変)による)

〔注〕陸奥の国——現在の東北地方の古称。「奥州」とも呼ばれる。後出の「平泉」は陸奥の国の中心地域で、藤原氏の館や寺社が建てられ栄えた。

よしの——吉野山。現在の奈良県に位置し、桜の名所として広く知られた。

素樸<sup>そぼく</sup>——「素朴」に同じ。

藤原三代——平安時代末期に、奥州を三代にわたつて治めた、藤原清衡・基衡・秀衡を指す。

一名——またの名。

聯想<sup>れんそう</sup>——「連想」に同じ。

中尊寺——平泉にある、奥州藤原氏ゆかりの寺。金色堂(光堂)や一字金輪像などが有名であつた。

数奇<sup>すき</sup>——風流を好む美意識。

山家集<sup>さんかしゅう</sup>——西行の歌集。

実方<sup>じつかた</sup>——藤原実方。平安時代の歌人。

詞書<sup>ことばがき</sup>——和歌のはじめに添えられる、歌を詠む状況を記した言葉。勧進——寺社や仏像などの建立・修理のために寄付を募ること。

義経——源義経。鎌倉時代の武将。

安倍貞任・宗任——平安時代の武将の兄弟。前九年の役で活躍した。

義家——源義家。平安時代の武将。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 西行が東稲山の桜を詠んでいるとあるが、本文で紹介された和歌Aについての筆者の解釈を説明したものととして最も適切なのは、

次のうちではどれか。

ア 西行が奥州への初めての旅で目にした東稲山の桜を詠んだ歌であり、山面の一带に咲きわたっている桜が思いの外に美しかったことに圧倒され衝撃を受けた心の動きを率直に歌ったものである。

イ 西行が今まで聞いたこともなかった東稲山の桜を詠んだ歌であり、都で広く知られていた吉野山を超えるほどの名所が奥州に存在していることに対する驚きを素直に歌ったものである。

ウ 古代から農耕の信仰を集めていた東稲山の桜を詠んだ歌であり、稲や桜という古来から受け継がれてきた自然の美しさに気付き、季節が変わりゆく予感を喜びとともに歌ったものである。

エ 平泉の一带を見渡すことのできる東稲山の桜を詠んだ歌であり、他の木々にまぎれることなく桜の花が咲き誇る様子に感動し、都の人々に花見をすることを勧めるために歌ったものである。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 西行の心境、<sup>(3)</sup> 西行の涙とあるが、これを説明したものととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「西行の心境」はすべてを差し置いてまで旅に恋い焦がれる気持ちを表したものであり、「西行の涙」は藤原氏が築き上げた歴史に対して深い畏敬の念を抱く西行の心のありようを表したものである。

イ 「西行の心境」は旅への期待で気もそぞろになり何事にも手がつかない気持ちを表したものであり、「西行の涙」は金色堂にあらわれる一瞬の美しさを見出す西行の心のありようを表したものである。

ウ 「西行の心境」は旅の誘惑に駆り立てられる落ち着かない気持ちを表したものであり、「西行の涙」は偶然旅で出会ったしがない僧侶に同情してしまふ西行の心のありようを表したものである。

エ 「西行の心境」は名所への好奇心に突き動かされた旅出の決意を表したものであり、「西行の涙」は僧侶たちの境遇を想像して悲しむような豊かな感受性をもつ西行の心のありようを表したものである。

〔問3〕<sup>(4)</sup> その歌の姿がおのずから見えて来るものだ。とあるが、筆者が考

える和歌Cの「歌の姿」を最も端的に表している言葉を本文中から七字で抜き出せ。

〔問4〕<sup>(5)</sup> 名状しがたいとあるが、この言葉の意味として適切なものを次のうちから選べ。

- ア 理解してもらえない
- イ 言葉では表現できない
- ウ 予期することができない
- エ 二度と味わうことのない

〔問5〕本文中にある和歌についての筆者の解釈を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 和歌Cの詞書の「いつしか」という言葉は、雪が吹き荒れて景色を見ることができず、旅の目的であった衣川をいつ見ることができなくなるのだからかと不安に思う西行の気持ちを表現したものである。
- イ 和歌Cの詞書の「様変りて」は、初めて衣川を見た際の驚きを表したものだとして一般に解釈されるが、歳月を重ねた西行自身の変化が投影されたものだとして解釈があり得ることを提示している。
- ウ 和歌Bも和歌Cも、藤原氏の勢力などには無関心でひたすら風情のみを求める西行の歌人としての姿勢がよくあらわれた秀歌であり、何度も口ずさむことで西行の思いを深く理解することができる。
- エ 和歌Bには西行が僧侶をあわれに感じたことが詠まれているのに対し、和歌Cは奥州藤原氏の繁栄と過去の戦における武士たちの活躍が重ねられており、西行の憧憬の念を感じ取ることができる。

7  
|  
日

園

五  
日